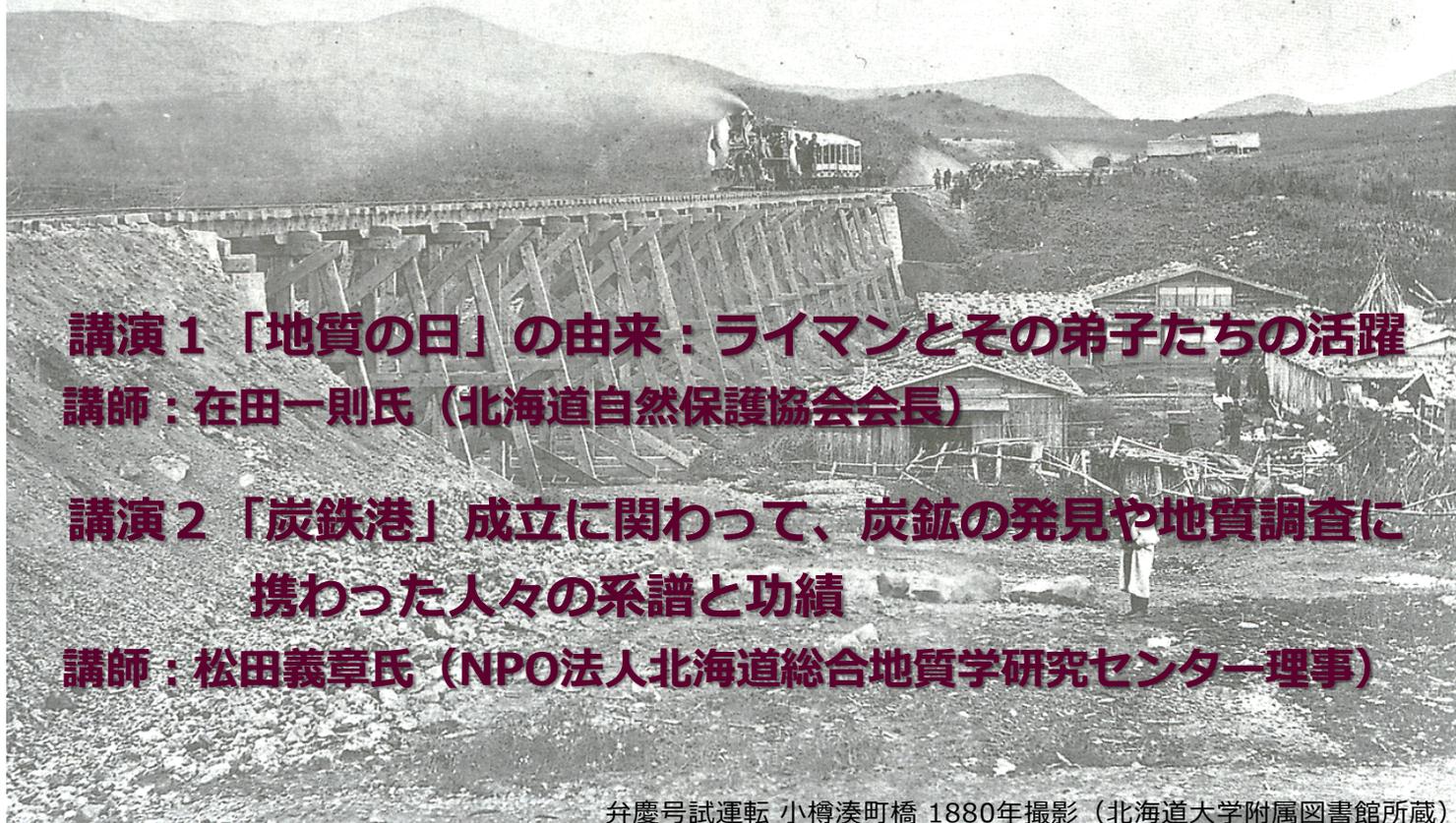


「地質の日」記念講演会

日本遺産「炭鉄港」成立に関わる 究極のルーツを探る



講演1 「地質の日」の由来：ライマンとその弟子たちの活躍

講師：在田一則氏（北海道自然保護協会会長）

**講演2 「炭鉄港」成立に関わって、炭鉱の発見や地質調査に
携わった人々の系譜と功績**

講師：松田義章氏（NPO法人北海道総合地質学研究センター理事）

弁慶号試運転 小樽湊町橋 1880年撮影（北海道大学附属図書館所蔵）



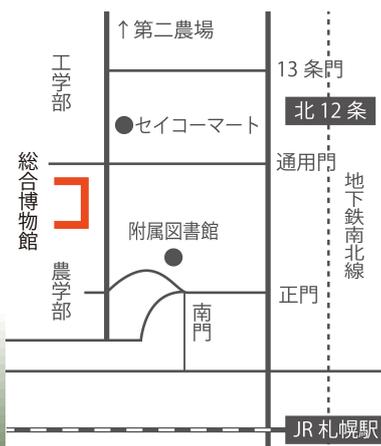
ライマンと若き弟子たち
1880年撮影（北海道大学附属図書館所蔵）

日時：5月25日（日）13:30～15:30

会場：北海道大学総合博物館1階
「知の交流」ホール

定員：60名（入場無料・事前申込不要）

【お問い合わせ先】
北海道大学総合博物館
TEL: 011-706-2658

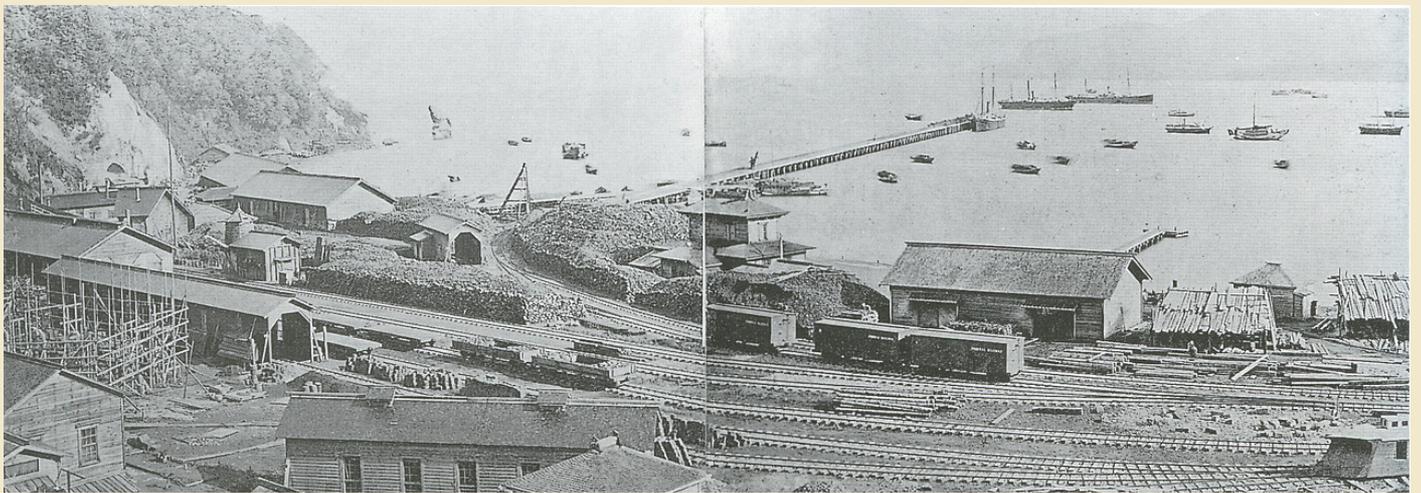


主催：「地質の日」記念行事実行委員会
共催：北海道大学総合博物館
協賛：一般社団法人北海道地質調査業協会

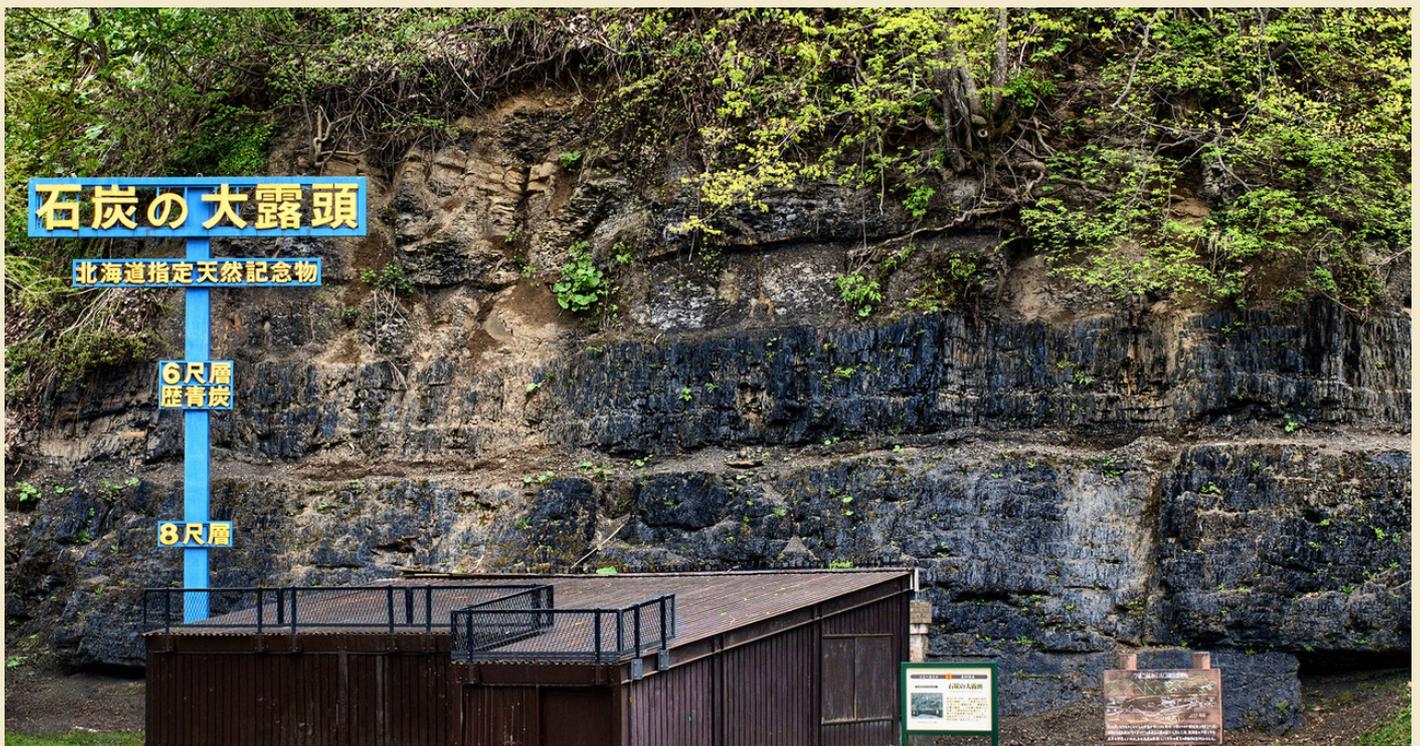
「炭鉄港」は文化庁が認定した北海道の日本遺産6カ所の一つです。「炭鉄港」は「石炭」・「鉄鋼」・「港湾」そしてそれらを繋ぐ「鉄道」を舞台に繰り広げられた「北の産業革命」を示す産業遺産で、北海道の発展に大きく貢献しました。

「炭鉄港」成立の端緒は、開拓使がアメリカから招いたお雇い外国人技師であるB.S.ライマンの地質調査による幌内炭鉱の発見にあったと言えます。しかし、さらに遡れば、江戸幕府が1854年に締結した日米和親条約によってアメリカ船へ良質の石炭を供給する義務が生じ、幕府が英米の鉱山技術者を招いたことにあります。

本講演では、日本の地質学の発祥の地の一つとされる北海道の地質の調査という視点から、ライマンとその前後に去来した人々、とくに榎本武揚の業績をも交えて「炭鉄港」の究極のルーツについて読み解きます。



手宮停車場と鉄道栈橋 1882年撮影（北海道大学附属図書館所蔵）



夕張市の石炭大露頭（川村 信人氏：北海道総合地質学研究センター 撮影・編集）